

大学ラグビーチームにおける傷害調査

Injury survey of the university rugby football team

1K06A0275

指導教員 主査 福林徹先生

井上 隼一

副査 山本巧先生

1:緒言

ラグビーは今日においてプレーからルールまで細部にわたるまで変化し続けてきた。現代のラグビーにおいては、戦術は多様化し、ランニングフィットネスとコンタクトフィットネスに依存したラグビーを根本から変革し、ポジションごとに特化したスキルの必要性を向上させた。そのためラグビーでは様々な傷害があり、この競技特有の傾向があることが報告されている。そのためラグビーに関する傷害調査を本邦ではあまり目にするのではなく、特に複数年にわたる国内の大学チームでの調査結果が乏しい。大学ラグビーにおける傷害発生率の低下の一助となることを期待し、ポジション別また技術レベル別、学年別の好発傷害を調査し、その傾向を知ることを目的とする。

2:方法

某大学体育会大学ラグビー部の2004年から2008年の5年間に在籍した部員数598人中で、受傷日から2日以上、練習または試合の傷害を原因として欠席した802件を対象とした。学年・ポジション・チーム(アルファベット順で上位チームの1軍・2軍をファースト・281人、3軍・4軍をセカンド334人、5軍以下をサード・187人)・受傷月・部位・疾患・患側・新規受傷もしくは再発・重症度の計9項目について調査を行った。部位については頭部・顔部・頸部・肩部・胸部・背部・腕部・腰部・股関節・臀部・膝部・大腿部・下腿部・足部の計14部に分類した。重症度は総受傷件数802件のうち有効デー

タが533件で、受傷期間ごとに2days~1weekをグレード、~1monthをグレード、~3monthsをグレード、3months~をグレードとした。受傷部位と件数・所属チームと件数・ポジションと件数・件数と重症度についての調査を行った。

3:結果

傷害部位のトップに来る部位は全体の21.4%の172件の足部で、続くのは全体の19.7%で158件の膝部である。それに全体の13.1%の肩部と続く。足部・膝部・大腿部・下腿部の下半身に全体の57.7%にあたる463件の傷害が集中している。ポジションにおける傷害件数で最も多かったのが、全体の19%を占める153件で、センター(以下、CTBと略す)である。続くのが、16%・127件のフランカー(以下、FLと略す)、14%・114件でウイング(以下、WTBと略す)であった。重症度ではグレードが222件と最も多く、グレードが163件、グレードは75件前後であった。学年別受傷件数が一番多かったのは2年生で225件、続いて1年生で208件、4年生で194件、一番少なかったのが3年生で175件だった。

4:考察

ラグビーでは約6割が下肢の傷害であり、下肢に負担がかかる競技であることが考えられる。強度の高いコンタクトプレーを行うファーストでは体がコンタクトプレーになれており、下のチームでは選手の能力の違いからコンタクトプ

レーにおいての傷害が上位チームより発生しやすいことが考えられる。ラグビーというコンタクトスポーツにおいて FL での肩部の傷害が多いことは FL のコンタクトプレーへの仕事量が多いことと密接に関連があると考えられる。重症度については膝部での傷害の復帰期間は最低でも2週間を要することが分かった。足部に関しては一概に足関節捻挫とひとくくりにまとめず、受傷起転や受傷場面を詳細に検討することが有用であると思われる